

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター カトリック仙台司教区・カリタスベース

(宮古・大槌・釜石・障がい者センターかまいし・大船渡・米川・石巻・福島デスク・原町・もみの木・CTVC)

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

今回は、見ていただくとお分かりのように、国際色豊かなニュースレターになりました。国連防災世界会議の海外からの出席者の寄稿を待っていたために、ご紹介するのが遅くなってしまいました。さらに、バチカンからと台湾からのお客様のニュース。そして、ベースでの活動は、いつもと変わらず続けられています。その中の一つ、大槌ベースの活動をご紹介します。

仙台で世界の災害・防災を考える —国連防災世界会議 パブリック・フォーラム報告

CTVC カトリック東京ボランティアセンター 山崎 恵

3月14日から18日まで、仙台市において第3回国連防災世界会議が行われました。本体会議では、今後の国際的な防災の指針となる「仙台防災枠組 2015-2030」が策定されました。



パブリック・フォーラムには多くの国際機関や NGO・NPO 等が参加し、防災に関する展示やセミナーなどが開催されました。国際カリタスも展示発表とシンポジウムを行い、各国のカリタスの取り組みについて紹介しました。私は開催初日と翌日の2日間、お手伝いをさせていただきました。

せんだいメディアテークで行われた「世界の防災展」では、国内外の約200団体が防災活動や災害救助等の取り組みについて紹介しました。国際カリタスのブースでは、カリタスアジアのスタッフが中心となってパネルにたくさんの資料を掲示し、にぎやかなブースになりました。被災地のカリタスベースをご存じの方がロゴを見てお声をかけてくださり、海外での幅広い活動についても知っていただく機会になりました。

15日には東北大学川内北キャンパスにて「信仰に基づく連帯と行動 (Faith-Based Solidarity and Action)」と題したシンポジウムを開催しました。カリタスジャパン秘書の瀬戸神父様による開会の挨拶の後、レバノン、ラテンアメリカ、アフリカ、フィリピン、サモアのスタッフからの災害時の救援活動や防災についての報告と仙台防災枠組策定に向けた国際カリタスの提言が行われました。各国の報告から、防災・災害のとらえ方について改めて考えさせられました。フィリピンの台風やサモアのサイクロンといった自然災害のみならず、レバノンでの紛争や難民流入の課題、アフリカにおけるエボラ出血熱やコレラなどもまた災害ととらえられていました。また、防災と聞くと避難訓練や被害予測など平常時に行うものという印象がありますが、現在起こっている災害への対応が次の災害リスクの軽減=防災につながっていくことを特にレバノンとアフリカの報告から学びました。



短い間でしたが、20ヶ国以上からお集まりいただいた国際カリタスの皆様をお迎えし、ご一緒できましたことに感謝しております。最後に、会議に参加された2名の感想をご紹介します。



『仙台はとても素敵な街並みで住みたいと思いました。仙台、そして日本がとても気に入りました。きちんとしていて礼儀正しい方々、教養のある方々、親切な方々にお会いできました。カリタスジャパンはじめ日本の皆様のご尽力とご支援に感謝申し上げます。皆様のサポートにより国際カリタスのイベントは成功のうちに終わることができました。』

—Ratha Lay, カリタスアジア (タイ) 【原文英語・抄訳】

『国連防災世界会議は、参加者のみならず、仙台そしてすべての日本の方々にとっても実りあるものとなりました。』

シンポジウムでは、2013年11月8日にフィリピン中部を襲った台風ハイエンの復興支援プログラムについて報告しました。台風から3ヶ月後、被害の大きかった9つの教区の社会活動センターが118の地域において参加型災害リスク評価 (PDRA) を実施しました。そして、地域住民が災害対応能力を分析し、その能力の格差を見きわめ、格差問題に取り組むための計画を立てられるよう支援しました。

国際カリタスのイベント以外にも、興味深い分科会や仙台周辺の被災地へのスタディツアーも行われました。仙台防災枠組の策定には時間がかかりましたが、全体的に見れば会議は成功し、意義深いものでした。温かいおもてなしに加え、日本からたくさんの方々のことを学ぶ機会があることを開催国は示しました。復興する力もそのひとつですが、なかでも素晴らしい特性は日本人の規律正しさです。科学技術の力もさることながら、規律正しさこそ日本人らしさを表し、日本の方々が生き延び、復興するために活かされた本物の価値であると思います。』

—Maria Melania B. Samonte, カリタスフィリピン

【原文英語・抄訳】



「みんなの遊び場」活動

カリタス大槌ベース 生利 望美

大槌ベースより、「みんなの遊び場」についてご紹介します。

大槌町では支援団体やボランティアセンター、役場職員などが集まって情報共有会というものを毎月行っています。その中で、子どものために何かできないか、と子どものための分科会が立ち上がりました。

大槌の小学生のほとんどはスクールバスを利用して、学校と家の往復で道草して遊んで帰るところがなく、子どもが身近に遊べる場所が少ないのです。ダンブカーが行き交い、外で安全に遊べないことなども子どもたちの抱えるストレスの原因の一つとなっています。そういった問題があることから、月に1度でもいいので、外で思いっきり遊べる環境を用意したい！と考えました。そして私たち外部の人間だけではなく、地域の人を巻き込んでいくことを目標に、「みんなの遊び場」という名前で活動が始まりました。



町の中心部は何も無くなってしまったけれど、四季折々のさまざまな自然を楽しむことができる場所が残っています。それを教えてくれたのは大槌で生まれ育った大人たちでした。大槌町の各地から様々な年代が集い、まちの「伝承」を考える町民団体、大槌陣屋というものが1年くらい前に結成されました。ここ100年ほど、岩手県沿岸に広く陣屋遊びという文化がありました。それが30年くらい前からぱたりと音沙汰がなくなったそうです。陣屋遊びは5月5日の子どもの遊びです。各町内の子どもたちが万国旗や大漁旗を用意し、杉の支柱に縄を巡らせ見事な陣屋を建て陣地を作ります。子どもの頃、陣屋遊びをしていた大人たちがこのような名前を付け、昨年5月にかつての陣屋遊びが復活しました。実際に陣屋を再現し、杉鉄砲、お手玉、ばった、といった昔懐かしい昭和の遊びも繰り広げられました。大槌陣屋では自然を楽しむことも企画され、これまでかんじきを履いての雪山登山、新山高原のツツジの手入れ、ホテル観賞会、幻の滝と言われる高滝のツアー、漁師の船でクルージング…などありました。わたしもこの陣屋に参加させてもらって、初めて…！大槌の楽しみ方を教わりました。そして、「みんなの遊び場」もこの陣屋と繋がるようになりました。陣屋のメンバーには山に詳しい森林インストラクターの方もいます。秋には大槌の里山である、鯨山登山に子どもたちも挑戦しました。山は紅葉真っ盛り。もみじにはたくさんの種類とそれぞれの名前があることなど実際に目で確認しながらいろいろなことを教えてもらいました。今年3月にはかんじきを履いて雪山を登りました。町から車で約40分、雪で一面真っ白。動物たちの足あとも見られます。この日一番楽しかったのは肥料袋で作ったそり滑りでした。大人たちも子どもと一緒に楽しんでいます。これからもこの町の魅力を知りたい大人たちと子どもたち、さらに子どもたちの親たちもつなげることができたらいいなあと考えています。他の支援団体や地域の人々と協力して、子どもたちを支えていきたいと思っています。



東日本大震災復興支援チャリティーコンサート

パチカンより日本へ 祈りのレクイエム日本公演 2015

2013年と2014年3月11日、パチカン聖パウロ大聖堂において、東日本大震災犠牲者への鎮魂と被災された方々のために、ロッシェニ歌劇場管弦楽団によるモーツァルトの「レクイエム」コンサートが開催されました。3回目となる2015年、現地日本で祈りをささげたいという関係者の強い思いから、日本公演実現の運びとなりました。

聖パウロ大聖堂名誉大司教であるモンテリーズィ枢機卿随行的のもと、ダニエーレ・アジマン氏が指揮するロッシェニ歌劇場管弦楽団と現地合唱団との共演でコンサートが行われ、宮城県では、3月20日（金）に仙台白百合学園を会場に開催されました。

コンサートの開始に先立って、15時から、モンテリーズィ枢機卿様と駐日教皇大使ジョゼフ・チェノットウ司教様他3名の司祭による共同司式で、鎮魂のミサがささげられました。



台湾から 東日本大震災慰問

台湾の台北教区にある萬金聖母マリア聖殿（教会）合唱団の皆さんが、台北大司教区の司教様を団長として、東日本大震災慰問のために、4月26日（日）、元寺小路教会を訪問されました。

17時から同合唱団による混声合唱の聖歌が、あるときは優しく、あるときは力強く聖堂いっぱいに響き渡りました。



元寺小路教会の聖歌隊と交流し、互いに親交を深めた後、18時から、平賀徹夫司教の主司式、台北の大司教様と小野寺洋一神父の共同司式でミサがささげられ、両聖歌隊の声に合わせて、参加者も神に賛美の声をささげました。

